

儂い音(2)

真琴は学校からバスで家の近くのバス停に戻り、坂を昇っていた。午後4時になっても上空に君臨し続ける太陽が消耗した体力を更にそいでいった。シャツは汗で体に張り付き、顔は水に突っ込んだも同然に濡れていた。

真琴は家の庭にあるビニールハウスが見えると安堵した。家の前に着き、ドアを開けて自分の部屋に直行した。窓は閉まっていて、西日が差していた。こもる熱気と散らばった部屋が更に発汗を煽っていた。

真琴は窓を開けた。熱気の代わりに生暖かい風が入り込んできた。汗まみれになった真琴の体に冷たさを与えた。体が震えた。荷物を置くと着替えを持って脱衣所に向かい、風呂場のドアを開けた。湯船には蓋がしてあった。既に湯が入っていた。両親は朝早く出て行く分、戻るのも早い。その為午後から夕方にかけて湯に浸かる為に風呂を炊いていた。

真琴は服を脱ぎ、風呂に入った。体を洗い、湯船に浸かった。湯船の中で今日あった出来事を頭の中で思い浮かべた。音楽室で会った平川という少女が転入し、他人を寄せ付けず、合唱で歌がうまく他の生徒を圧倒した。転入生として謎が多いのは当然だが個性が強く今でも忘れていない。風呂から上がって着替えると居間に向かった。母が夕食の準備をしていた。

「おかえり、夕方に風呂なんて珍しいわね」母は気軽に話しかけた。

「暑かったし、もう出かける予定はないから」真琴は何も乗っていないテーブルを見て、気難しい表情をした。今日の最初に起きた出来事のうち、学校に行く際に何があったかを思い出した。「今日はバスが来る前に大葉さんが来て、送ってくれたんだ」

「そうなの」母は適当に相槌を打った。

「その時に兄さんについて聞かれたんだけど、知ってる」

「朝に言った通り、もう戻って来ないから分からないよ」

「でも、電話くらいよこしてもいいよね」

「向こうには向こうの事情ってのがあってあるんでしょ」

真琴は母に尋ねるのをやめた。朝と同じ答えしか返ってこないからだ。

ドアが開く音がした。父が居間に入って来た。青い帽子をかぶっていて、くたびれた厚手の服を着ていた。手は皺が鮮明になっているが所々に瑞々しさが残っており、顔には若さが残っていた。「おう、ただ今戻った」父は濁った声で気さくに言った。長年潮に晒されている船の上で大声を出し続けてきた為、見た目よりも老いた声となっていた。肌は赤く、よれた髪に艶があった。

「お帰りなさい」真琴は丁寧な言葉で言った。漁師の家は家長制による序列が強い。父は幼い頃より真琴に畏怖を叩き込み、言葉遣い一つも選ぶ余裕を許さなかった。

「夕飯は出来てるのか」父はテーブルに付いた。

「すぐに出来ます」母は台所から佃煮や漬物、野菜炒めが入った鉢をテーブルに置き、白飯を盛って父のそばに置いた。

父は黙って食事を取り始めた。古い男にとって、最大の娯楽は仕事であり食事は生きるための作業でしかない。母と真琴を睨んだ。

真琴と母に無言の圧力が取り付いた。父の要求を否定する権利はなかった。自分達の茶碗を盛りテーブルに付いた。

皆が皆、黙々と食事をした。黙っている分、口に入れた食べ物の味が強くなっていた。

真琴は口に入れている薄まらない味のものを飲み込んだ。「あの」

「何だ」

「夏祭りだけど、来る」

「何で行かなければならんのだ」

「いや、その」真琴はうなだれた。重々しい空気を少しでも軽くしようとしたが、余計に重くなった。「音楽会で優勝したから、夏祭りで歌うから」

「だから何だ、お前の勝手に俺が付き合う理由はない」父は平然と切り捨てた。家では絶対の権利を持っている以上、子供と言う弱者の要求を呑む気はなかった。

「合唱の練習はどうなの」母は真琴に振った。

「新しい人が来たんだ」

「何処の村からだ」父は興味を示した。村から出ていく人は多いが、入ってくる人というのは珍しく話題になりやすい。父も例にもれず、新参者の話題に触れようとした。

「分からない。けど大葉さんが近くで来るって言ってたからうちの村じゃないかな」

「大葉だと」父の眉間に皺が寄った。村の間人は大葉という人間にいい印象はない。特に古巣の人間には糞にたかる蠅に匹敵する鬱陶しさだった。

「大葉さんで思い出した。聞かれたんだけど、兄さんはどうして戻ってこないのかな」
「あいつはあいつでやっている。問題があれば戻るだろう」
「でも、盆と正月に戻らないって異常だよ」
「忙しかれば戻らん。俺もそうだ、相手は自分に合わせて待ってくれん」
真琴は項垂れた。
「戻ってくるのに理由が欲しいのか」
「そうじゃなくて、何でだろうって」
「もういいじゃない」母は真琴に突っ込んだ。
「あいつは自分で出て行ったんだ。戻って来ないなら健康な証だ、何も問題はない」
真琴は頷いた。いくら質問をしても同じ答えしか返ってこないのなら、質問をしても無意味だ。結論以上の回答が出るはずがない。淡々と椀の中にある白飯の消化を進めた。
「真琴。村は寂れていく一方だが静観している訳ではない。時間をかけてルールを変えて新しく人が入れるようにしている。外に出る者も他所者と同じく入れる余地を作ろうとしている。」
真琴は食を止めた。「どうして、時間がかかるのですか」
「他人が楽をしているのが耐えられないんだ。まして規則を知らぬ余所者が闊歩しているのは許せない。だから何としてでも自分達より重い枷を掙を作ってはめようとするんだ」
真琴は眉をひそめた。子供という守ってもらう立場である為、父の言う掙について理解が出来なかった。
「だが、掙というのは誰もが従う規則だ。守ってもらわなければ別の意味で村が崩壊する」父は小鉢に入った佃煮を突いた。
「ええ。余所者には守ってもらわないと私達が困ります」母は父を助けるように言った。
真琴は食事を終え、両手を合わせた。「ごちそうさまでした」丁寧に言い、席を立てて部屋に戻った。
翌日は学校が休みであった為、真琴は漁をしている父の手伝いに向かった。娯楽が少ない村において、休日に親の手伝いで時間を潰すのはありきたりだった。日常の一つとして溶け込んでいた。

休みが明けた。学校に行く日常が始まった。
真琴も日常に従った。休み前と同じく早めに登校した。外で部活動をしている生徒を尻目にげた箱に向かい、下履きと上履きを履き替えた。
照美は階段の上から様子を見ていた。真琴が履物を変えたタイミングで駆けつけてきた。「やっと来たわね」
「おはようございます」
照美は誠の丁寧な言葉にいらついた。「同級生なんだから、別にいいわよ」
真琴は眉をひそめた。以前は挨拶をしると言っておきながら、挨拶をしたら否定する。照美の言動が理解できなかった。
「いつもこんな時間に来てるの、随分早いわね」
「いや、井崎さんも随分早いんだなって」
「ああ、あたしは大事な用があってね」
「用ですか」
井崎は頷いた。「そうよ、山下君。貴方にしか頼めない用事よ」
「何ですか」真琴は恐る恐る聞いた。何をしても自分が率先してやる目立ちたがり屋が他人に頼むと言うのは、大抵押し付けか嫌な用件だからだ。
「あのさ」照美は真琴から目をそらした。「平川って子、楽譜に目を通してただけで歌ってたでしょ」
「そうだっけ」
照美は真琴に食って掛かった。「そうよ。あいつ、本当なら楽譜なしでも歌えるのを、わざと楽譜に目を通してうたってんのよ。見せしめって本当に嫌よね」
「わざとって、そんなに酷い人には思えないんだけど」
「どういう根拠があって、そう言えるの。あいつは他人なんかこれっぽっちも同じになんか見てない、見下してるのよ」照美は真琴に喰ってかかった。
真琴は引き下がった。「そう言っても」
「机の中にある平川さんの楽譜を取ってきて」
真琴は照美の言っている内容が理解出来なかった。「どうして、取ってくる必要があるんですか」
「楽譜なんて必要ないでしょ、きっちり歌えるんだもの」
「そういう意味じゃなくて、人の物を取ってくるというのが駄目なんです」

照美は困った表情をした。「どうしても嫌なの」

「嫌です」

「どうしても」

「二ヶ月前にあった体育祭のゼッケン」照美は白々しく言った。「縫う時間がないからって泣きついたの誰だったっけ。出来なかったら体育祭に参加できなくなって皆から文句言われてたわよね」

真琴は渋い表情をした。過去に起こした失態は本人の記憶から消せても、他人の記憶からは消えない。まして他人が当人を利用する格好のカードとなれば、強く記憶回路のケースに居残り続ける。本人の元へ返る日を今か今かと待っているのだ。

真琴は項垂れた。借りを作ったと他人に分かれれば、一度出せば捨てられるカードが一生飼われ続ける証のリードに変わる。釣りが来るどころの話ではない。

「分かったよ」真琴は渋々了承した。カードはカードのまま、返せば流れて消える手段を選択した。

「取ってきてどうするんだ」

「私に渡せばいいわ。姉の所に戻せばいいだけだから」

真琴はわずかに安堵した。処分ではなく教師である姉の元に返すのであれば未だ救いがあると判断した。階段を上がって教室に向かった。照美は後をついていった。

教室は2、3人程生徒がいて、話し込んでいた。真琴のいる村はバスが少ない為に早めに来る傾向があるが、元々子供の数が少ないので生徒の数もまばらだった。

「人がいるんだけど」

「勝手にしょ。あたしが適当にごまかすからその間に取ってきなさい」

「何処に」

「机の中にあるわ」照美は席に向かい、机の中からノートを取り出すと生徒達の輪に入っていった。「おはよう」

生徒達は照美に目を向け、話し始めた。

真琴は渋々平川の席に向かい、机の中に手を入れた。厚紙が指に当たる感触がした。人差し指と中指で挟み込んで抜き取った。黄色の厚紙で包装した楽譜だった。

生徒達に背を向け、楽譜が見えないようにした。

教室に男子生徒が入ってきた。真琴に目をやった。「よお、おはよう」

真琴は驚き、体が震えた。「な、何だよ」

「挨拶だけでビビってるんじゃないって」

「あ、ああ」真琴は落ち着いた。

「お前がいるとこ、平川の机だろ。何してんだ」

「あ、いやそれは」真琴は曖昧に返事をした。机の中から奪ったとは、とても言えない。

照美は真琴の方を向いた。「一寸待っててね」照美は女子生徒のグループを抜け、真琴の隣に来た。

「転入生だけど、帰りのバスで楽譜を確認したいって言ってたんだけどさ。学校に入ったばかりって何時に出ればどう着くかってわからないじゃない。だから先に来てたんだけど来なくて待ってるんだ」照美は真琴の方を軽く叩いた。「そうよね」

「楽譜って皆同じだろ」

「印刷がずれてるみたいなのよ、姉さんそういう所抜けてるから」

「そうかもな」男子生徒は席についた。

真琴は席に向かい荷物を机に乗せた。

照美は何事もなく真琴から楽譜を受け取った。「ありがと」

真琴はため息を付き、楽譜を開いた。何も書き込んでおらず、照美の言っていたズレもなかった。「これっからかな」

「ええ。あたしも同じ頼みを二度、三度もするような馬鹿じゃないから」照美は楽譜をノートに挟み真琴に差し出した。「山下君、貴方が持っていて」

真琴は照美の行動に驚いた。受け取って終わりかと予想していたからだ。

「どうして、俺が持たなきゃいけないんだ」真琴は素直に照美に尋ねた。

「取るだけならあたしでも出来るわ。なんで頼んだと思ってるの」照美は平然と言った。

真琴は仕方なく受け取った。既に楽譜を奪う頼みに関わっている以上、拒否する選択肢はなかった。

「ありがと」照美は元の席に戻った。

真琴は挟んだノートを見つめた。開ければ全てを失う玉手箱に見えた。一刻も早く元から離れたかった。自分の席に向かい、楽譜を勢よく机の中に入れたら、本来の楽譜を取り出し、職員室へと向かった。扉を叩くと井崎が出てきた。

井崎は同じ時間に職員室を尋ねていたので誰が何の用で来るのか分かっていた。

真琴は音楽室の鍵を井崎から借り、音楽室に向かった。

中に入ると誰もいなかった。音楽室の鍵を借りたのだから誰もいないのは当然だ、先客がいなければ鍵を借りるというのは出来ないからだ。入るなり周辺を確認し、花瓶に目をやった。以前交換したスターチスはしおれているものの、枯れてはいなかった。早速花瓶を手に取り音楽室の外に出て水を交換した。作業を終えると鞆から楽譜を取り出して壇に立ち、楽譜を開き、前を見据えた。以前と同じ光景があった。楽譜を見ながら歌を歌い始めた。今まで通りに歌っていけば引っかかりで通しで終わる。しかし、最初の小節で噓んだ。歌を止め、楽譜を確認した。今まで出だして引っかかりの経験はなかった。大きく息を吸い、歌い始めた。またしても同じ所で噓んだ。不思議に感じて楽譜を眺めて歌い始めた。何度も同じ所で噓んだ。他人のものを奪った業に対する迷いや後悔が歌い方に現れていたが、当の本人は気付かなかった。調子が悪さから集中力が欠け、何かにつけて時計を見ていた。時計の針が8時35分を正確に示した。荷物を纏め、音楽室を出ると扉を閉めた。

教室に向かい、何食わぬ顔で入った。クラスメイトが雑談をしていた。平川の周りに女子生徒が集まっていた。休みが明けても珍しさと憧れから来る好奇心は消えていなかった。

平川は教室に入ってきた真琴の方を向いた。真琴と目が合った。

真琴は僅かに目を背け、前にいる照美に目をやった。

平川は真琴の目を追い、照美に目をやった。照美はグループに混ざって雑談をしていた。

チャイムが鳴った。生徒達は一斉に席に着いた。

井崎が入ってきた。

真琴は平川の方を見た。平川は平静なまなざしで井崎を見ていた。井崎は生徒達に説明をしていた。

授業が終わり、午後の練習に入った。休みの前と同じ日程で、終業式と休日を除いた毎日が練習のスケジュールだった。真琴は音楽室に入り、自分の立ち位置に着いた。一度も平川の位置を見なかった。

平川は楽譜を持たず、前に井崎に案内された位置に着いた。

隣にいる女子生徒は、平川が楽譜を持っていないのに気づいた。「平川さん、楽譜はどうしたの」平川に尋ねた。

真琴は女子生徒の声を聞き、平川の方を向いて手元を見た。女子生徒の言うとおりに、手に楽譜を持っていなかった。

平川は女子生徒の方を向いた。「家に持って帰ったのを忘れた。持ってくるにしても遠いから」

「家、何処だっけ」

「山北村」

平川の言葉に、女子生徒は頷いた。「遠いね、忘れたら取に行ける距離じゃないわ」

「ええ」

真琴は気難しい表情をして平川から目を背けた。

「仕方ないわね、誰か見せてあげて」

「はい」平川の隣にいる女子生徒は返事をし、楽譜を平川に見せようとした。

平川は楽譜を一目見た。どこで息をついで何処でパートが切り替わるか詳細に書き込みがしてあった。見終えると女子生徒の手を払った。「大丈夫、覚えてるから」

「え」女子生徒は驚いた。いくら課題曲で歌った経験があるとは言え、覚えているから不要というのは不可解だった。

「でも、確認しないと」

「大丈夫だから」

井崎は平川が女子生徒の好意を拒んでいるのを見て、眉を顰めた。「どうしたんですか」

「先生、平川さんが楽譜を見なくていいと言っているんです」

井崎は平川の元に向かった。「平川さん、どうしてですか」

「覚えているから大丈夫って言っているのに、見なきゃ駄目だって」

井崎は平川の言葉に眉を顰めた。平川は悪意や傲慢から言っているのではないというのは表情から分かる。不要であると分かっている、とりあえず従うという判断が出来ないのだ。

照美は生徒達を払い井崎の前に来た。「本人が不要って言っているんだから、いいんじゃないですか」

「でも」

「でも何もありません。見るだの見ないだのと言った話で練習時間を無駄にするんですか」

井崎は生徒達を見た。生徒達は静観していた。

「そうね、じゃあ始めましょう」

照美は平川の方を向いた。平川は平然としていた。「本当に鬱陶しいわね。間違えたら、練習の邪魔とみなして外れてもらうから」

「井崎さん」井崎は照美に強く言った。言ったそばから自分からトラブルを作り、余計な時間を食わせる照美の行

動をたしなめる必要があった。

「分かってるわよ」照美は踵を返した。同時に、平川の隣にいる女子生徒に目を向けた。女子生徒は黙って頷いた。

照美は自分の立ち位置に戻った。

井崎は平川の側に寄った。「平川さん、大丈夫」井崎は平川に尋ねた。融通の利かない意固地な性格なので、強がりと言っているだけの可能性もある。

平川は頷いた。「うん、大丈夫」

井崎は指揮を取る位置に着いた。「では始めます」井崎はピアノを弾く生徒に目をやった。生徒は頷いた。手振りでも指揮を始めた。伴奏が音楽室全体に響いた。

井崎の指揮に合わせて生徒達が歌を歌い始めた。

平川の隣にいる生徒は後ろや横から来る歌声に混じった平川の声の拾い、聴き込んだ。以前と同じ歌声で、歌詞も明確で間違いはなかった。

一通りの練習が終わった。

伴奏が終わり静まり返っていた。特に乱れもなかった。

照美は平川の様子を伺った。表情を変えずに井崎の方を向いていた。両隣の生徒は楽譜を最初のページに戻していた。

「全体的に良くなっていますが、遅れ気味です。指揮の振りからずれないように」

『はい』生徒達の声が響いた。

井崎は手を振った。再び伴奏が流れた。通しでの練習が続いた。

幾度か通しに寄る合唱を終えた。

井崎は壁にかけてある時計に目をやった。1時50分を示していた。生徒達の方を向いた。生徒達は皆、井崎の方を向いて立っていた。

「2時になるまで休憩ね」井崎は手を叩いた。「はい、解散」

生徒達は練習という催眠術から解けた。仲間同士で集まり雑談する者、一人で窓から見える景色を眺める者、教室を出ていく者とに分かれた。

井崎は音楽室を出ていった。

照美は平川の隣にいた生徒の元に向かった。「どうだった」

「変わらずに上手だったわ」

照美は女子生徒の言葉に渋い表情をした。想定していた答えと異なっているばかりか、賞賛する言葉が返ってきたからだ。「あたしが聞きたいのは、転入生が変な真似しかなかったかって意味よ」

「そんなに嫌なの」

「他人を馬鹿にしてるわよ」照美は音楽室を見回して平川を探した。窓の側で景色を見ていた。

「確かにとっつきにくいけど、入ってきたばかりだから仕方ないじゃない。最初から話しかけてくる方が不思議よ」

照美は女子生徒の言葉に唸った。心の奥底に沈んでいる不安が、平川という存在を核に集まっていた。

真琴は平川の側に来た。不安げな、何かを隠しているのが分かる表情をしていた。「あのさ」

平川は真琴の方を向いた。「何」

「楽譜だけど」

「予備はないんですよ。家においてきたからそのまま歌うしかないわ」

「そうじゃなくて、その」真琴の表情が曇った。「ええと、家にもないんじゃないかなって」

「分からないわ。机の中になかったから。他の所にあるわ。ボロボロになってない限り」

「あるんだけど、その」真琴は平川から目をそらした。

平川の眉間にシワが寄った。真琴の態度は自分が目の当たりにした男とよく似ていた。自分がいいたくない、恥ずかしい内容を遠回しに語り、相手に言わせて同意を求めるやり方だ。「勿体ぶらないで、話して」

真琴は黙り込んだ。直接言えば相手がどう反応するか予測が付いていた。休憩中に揉め事は起こしたくない。しかし、自分がしでかした業について言わなければ心の中で沈みながら膨れ上がっていく。ミダスの耳を目の当たりにした理髪店の男の心境だった。「楽譜だけど、あるんだ」

平川は表情を変えなかった。「証拠は」

真琴は時計を見た。1時58分を示していた。「終わったら話すよ」

「そう」平川は真琴から目をそらした。

真琴は平川の態度に眉を顰めた。怒るのかと思っていたが、卑猥な本を見つけて呼び出す母親と同じ位に冷静だった。

井崎が音楽室に入ってきた。「時間よ、位置につきなさい」

生徒達は一斉に位置に付いた。自由に彷徨う気体から個体になって一気に固まる分子と同じ動きだった。

「井崎は生徒達を見て、位置と人数を確かめた。特に転入したばかりの平川の位置を確認した。位置を忘れていないか気にかけていた。指定した位置に平川は立っていた。覚えていた。

「全員いるわね」井崎は頷いた。「じゃあ、始めるわね」井崎はピアノに目をやった。伴奏を担当する生徒は相槌を打ち、ピアノを弾き始めた。

生徒達は伴奏に合わせて歌い始めた。

合唱の練習は続いた。生徒達と井崎との時間は体感するよりも早く過ぎていった。

井崎は時計を見た。3時を示していた。

「もういいわね、今日はここで終わり。もう大丈夫だから明日は早めに上がるわ」井崎は生徒達に話しかけた。

『はい』生徒は威勢のよい返事をした。

井崎は生徒に礼をした。

生徒達は井崎に向けて一斉に頭を下げた。『ありがとうございました』

井崎は音楽室を出ていった。

生徒達は緊張を解き、音楽室から出ていった。平川は壇上から降りて机の前で立っていた。

真琴は平川の元に来た。「楽譜だけど」

「あるのね」

真琴は頷いた。照美に気付かれず手元から返し、事情を話せば全て終わる。心にしこりは残るが膨らみはしない。後は棚の奥に眠らせて大掃除に取り除くか、墓に体ごと持っていけばいいだけだ。何も言葉を返さず、音楽室から出て行った。平川は真琴の後をついて行った。

照美は音楽室を出ていく真琴と平川の姿を見た。仲が良く見えなかったが、陰悪にも見えなかった。要があるので呼び出した教師と生徒の関係に見えた。2人の行動を訝しげに見ると、後を追って音楽室を出た。

廊下は教室に向かう生徒達がいた。皆教室に戻り、荷物を取って出て行った。

真琴と平川は共に教室に入った。窓際で話しこんでいる生徒がいた。バスが来るまで暇をつぶすには学校内以外にない。周辺には中学生が利用出来る施設が何もないからだ。

真琴は自分の机に向かい、中に手を突っ込んでノートを取り出した。

平川は真琴の元に向かい、様子を見ていた。

照美が教室に入ってきた。机からノートを取り出す真琴と、傍らにいる平川の姿を見つけた。

「何してるの」照美は真琴に近づいた。明らかに朝、楽譜を挟んだノートを持っていた。咄嗟にノートを取り上げた。

「ノートがどうかしたの」平川は照美に尋ねた。照美は興奮で顔が赤くなっていた。平川の楽譜を盗んだと分かれば、分かる前よりも恥をかく。最悪品格がないとみなして他の生徒より優秀である証のソロパートの権利を失いかねない。

「何でもないわよ」

「ノートの中に楽譜がはさんであるんだ」

照美は真の言葉に動揺した。やましい証拠だ。

「別にいいでしょ」照美は教室から出て行った。

真琴と平川は照美の後をついて行った。

照美は階段を上がり、端に来た。真琴のクラスを除いた生徒達は夏休み前で半ドンとなっていた為、皆帰宅しているか部活動で出払っていた。蝉の音が窓を通して聞こえていた。立ち止まった。

真琴と平川は照美と対峙する形で立ち止まった。

照美はノートを開いた。楽譜が挟まっていた。平川は冷たい視線でノートに挟まっていた楽譜を見た。

「ごめん」真琴は平川に謝った。

「どうして、謝るの」平川は真琴に尋ねた。謝らなければならない理由が理解できなかった。

「いや、楽譜を机から出したのは俺だから」

「でも」平川は照美の方を見た。照美は眉間にしわを寄せていた。苛立っている空気が体から漂っていた。「持っているのは別の人でしょ。机から出した証拠はあるの」

「いや、その」真琴はたじろいだ。平川言葉は正論だった。実際に机から出したとはいえ、証拠がないのでは証明しようがない。

「確かにそうなんだけど。でも楽譜を取ったのを知っているから」

「見ていただけかもしれないでしょ」平川は真琴を追求した。実際に関わっておらず単に見ていただけだったと仮定しても、矛盾はなく話は通じてしまう。

「面倒くさい人ね」照美は真琴を払い前に出た。「山下君を擁護して、あたしを犯人に仕立て上げたいみたいだけど、実際に抜いたのは確かよ。あたしは単に受け取っただけだから」

平川は冷ややかな目線で照美を見た。照美がノートを持っている限り、どんなに擁護しても疑いは消えなかつ

た。1+1が2と言う答えになるのは誰もが分かるが過程は一切考慮しない。結果だけ分かっていたら、正しいか間違っているかを問わない限り全ての過程を無視して逆算的に原因を物語るのは可能だ。

平川は真琴を見た。真琴はひしゃげていた。

「だとしても、楽譜があるのに変わらないわ。返して」

真琴は照美の方を向いた。照美は渋々ノートから楽譜を取り出して渡した。

平川は楽譜を受け取った。

「ごめん」

「別にいいわ、楽譜があるとわかっただけで十分だから」

照美は平川の態度に怒りを覚えた。

「何でもいいから言いなさいよ」平川は真琴に目をやった。真琴は落ち着きを見せていた。

「何を」平川は平然と言った。皮肉や詭弁ではなく、本当に何を返していいか分からなかった。なくなった楽譜の行方が分かり、戻ってきたと言う事実だけで十分だったからだ。

「こいつが仕組んだのよ。酷いとか、馬鹿だとか思わないの」

「全然」

照美は平川の態度に苛立ちを越えて怒りを覚えた。普通に考えれば盗んだ人間が目の前に入れば罵倒するか殴り掛かるかする。実際にやれば暴力沙汰を起こしたとして脅しを掛けるカードに出来る。そう考えていたが実際には異なっていた。誘導も万策を弄せずに自分の思い通りに物事が進むというのはまずあり得ない、という常識が欠けていた。思い通りに行かない状態で誘導する為にどうするかと言えば、一番簡単な答えは一つしかない。自分から攻めるだけだ。

「本当にクズね」照美は平川に近づき、平手打ちをした。平川は抵抗せずに受け、顔が歪んだ。

「井崎さん」真琴は照美の前に出た。「何をしてるんですか」

「態度が苛つくのよ」平川は手を握りしめた。転入してすぐに合唱に入り込み、自分達の輪を崩す。維持する為に楽譜を盗んで取り除こうとしてもオナモミの実と同等にまとわりついて引き剥がせなくなる。

平川は赤くなった頬を手当て、照美を見た。顔が赤くなっていた。

照美は真琴を払った。「入ってきてそうそう、生意気な真似して輪を崩すって。アンタって何様のつもりなの。上町から来たって何よ、それだけで偉くなれるの」照美は矢継ぎ早に声を上げた。

「やめなよ」真琴は照美をなだめた。

照美は真琴の抑えを無視した。照美は黙ったが、不満は塞ぎきれず膨れていた。

「こっちは、先生」生徒の声が響いた。

真琴達は声が出た方に向いた。生徒と井崎が立っていた。人気のない所で大声が聞こえたので、揉め事があったのだと井崎を連れて来たのだ。

井崎は真琴達に近づいてきた。「何があったの」

真琴はため息を付いた。黙っていても埒が明かないのは明らかだった。「あの、平川さんが無くした楽譜なんですけど」平川の手元を見た。楽譜を持っていた。

「家に置いてきたんじゃないの」井崎は真琴に尋ね、平川の方を向いた。腫れは引いているものの、頬の赤みは完全に引いていなかった。

井崎は事態を把握し、生徒の方を向いた。生徒は事態を把握できず、真琴達と井崎を交互に見ていた。「貴方は帰っていいわ」

「は、はい」生徒は踵を返して去っていった。

照美は平川を睨んだ。「あいつが最初に突っかかってきたのよ。自分のせいで楽譜を無くしたのに、あたしが悪いって文句言ってきてさ」照美は真琴の方を向いた。

真琴は渋い表情をした。照美の目線が何も言うなと言うメッセージと重圧をかけてきて、嘘を嘘であるという事実を口に出さなかった。

「そうなの」井崎は平川に尋ねた。

「そうよ、事実なんだから」照美は強く声に出した。機先を制して何も言わせない方法を選択した。

平川は何も答えなかった。

井崎は腕を組んだ。「あなた達、職員室に来なさい。すぐに」

『はい』井崎の高圧的な言葉に3人は従うしかなかった。

井崎は踵を返し、職員室に向かって歩いていった。3人は後をついていった。職員室に向かい、中に入った。

職員室の中に誰もいなかった。帰ったか、部活の指導で出払っているかしかいかなかった。

井崎は自分の机に向かい、席に付いた。以前と同じく机に整理していない書類で山が出来上がっていた。

「平川さん、持っている楽譜は自分のなの」

「はい」平川は淡々と答えた。

井崎は真琴と照美を見た。真琴は井崎の鋭い視線に僅かに動揺した。練習の時に楽譜がなければ損をするのは自分であり他人ではない。となれば楽譜を自分から手放すはずがない。となれば楽譜を自分の関わりがない所で失い、何らかの形で戻ったと考えるのが自然だ。

「どうして、家においできたと言ったの」

「机の下にない、鞆にも入っていなければ家しか思いつかなかった」

「分からなかったのね」

「はい」平川は頷いた。

井崎は真琴の方を向いた。真琴は緊張した。「楽譜について知ってるわね。でなければ揉めないでしょ」

真琴は頷いた。今言わなければ話す機会はない。事実を話して茨の冠を被る覚悟は出来ていた。「前の日に井崎さんに言われて、平川さんの机から楽譜を抜きました。ノートに挟んで隠すようにと言われました」

「本当なの」井崎は照美に尋ねた。

「勝手にやっただけよ。あたしは無関係だから」

「挟んだノートを見せて」

「何だよ」照美は突っかかった。

「いいから見せなさい」井崎は威圧的に言った。

照美は渋々ノートを差し出した。

井崎はノートを受取り、表紙と裏表紙を観察した後捲って中身を見た。最初のページに書き込んである以外、何も書き込んでいなかった。字体は見慣れた照美の癖があった。

「隠したのは照美、貴方ね」

「違うわ、実際にやったのは山下君よ。本人だってそう言ってるんだから間違いないわ」

「そうね」井崎は頷いた。照美と真琴の証言に嘘がなければ照美が指示して真琴が実行したというのが妥当だ。

「平川さんはどう思ってるの」

「どうって」平川は黙った。特に何も考えていなかった。

「楽譜を取った2人に、どうして欲しいのかって聞いているの」

「別に何も」

井崎は平川の言葉に渋い表情をした。被害者が犯人がいる前で何の感情も湧いてこないと言うのはあり得ない。

「本当に何も思っていないの」

「なくなった楽譜が戻ってきた。原因も分かったから十分」平川は真琴の方を向いた。

真琴は平川の視線に項垂れた。何も罰を受けないという自由が、余りにも強烈な枷となり鎖が胸を縛り付けた。「もういいわね」平川は呆れ気味に言った。罰というのは加害者を戒めると同時に被害者の心を軽くする目的がある。被害者が望まないにもかかわらず罰すれば、意図に反し互いに疑心と確執を生む。

「はい」平川は返事をした。

「ならもういいわ。次も同じトラブルを起こしたら合唱から外すから」

「はい」真琴達は返事をした。

平川は踵を返し、職員室から去った。

真琴と照美は立ったまま動かなかった。

「どうしたの」井崎は3人に尋ねた。

「あたしは用があるから待ってるの」照美は怒り気味に言った。

「いえ、帰っていいのかなって」真琴は重々しく言った。

井崎は笑った。「もういいわよ、帰りなさい」

「分かりました」真琴は踵を返し、職員室を出ていった。

職員室のドアが閉まる音がした。

「井崎姉、転入生だけど外した方がいいわ」照美は井崎に強く言った。

「彼女の歌を聞かなかったの。十分じゃない」

「そうじゃないわ、今まで築いた皆の輪を崩すわ。合唱コンクールで優勝するまでにどれほど皆で努力したか分かっているの。あの子はそういう努力をしないでいきなり入り込んだのよ。ちやほやすると調子に乗って全部消しにかかるわよ」

「何で、合唱コンクールをやるか分かる」井崎は照美に尋ねた。

「クラスの優越を決める為じゃないの」

「皆で何かを成し遂げる大事さを学ぶ為よ。誰が一番とか、優秀だとかは結果でしかないの。目標があって、皆で一つになって懸命になる。社会に出てから重要になるから、合唱コンクールを通して学ぶの」

「でも、仲良しごっこでやられても皆は困るだけよ」

「皆って誰なの。貴方以外に文句を言っていた人っている」

照美は黙った。皆と言うのはかく言う自分自身一人を差している言葉でしかなく、自分以外のの皆は存在しなかった。絵に描いた虎は存在しない。「もういいわよ」

「ならいいわ」井崎は僅かに笑みを浮かべた。「近々夏休みで片付けがあるんで帰りが遅くなるわ。家に楽譜のデータを入れたCDがあるはずだから、取り出して机の一番上においといてくれない」

照美は井崎のデスクを見た。周辺のデスクと明らかにの高さが異なる書類の山があった。周囲が日本アルプスなら、イサキのデスクに積んである書類は山脈を寄せ付けない孤高の富士山だ。

「なんであたしが探さなきゃダメなのよ」

「だって」井崎は両手を組んだ。「机を調べてもなかったのよ。だったら家にあるしかないじゃない」

「予備がないって前の練習で言ってなかったっけ」

「予備を作る必要があるから、マスターの楽譜を探してって言ってるの」

「あたしの楽譜でいいじゃない」

「何も書き込んでなければね」

照美は井崎の言葉に黙った。楽譜は井崎の指示で各々のパートについて書き込みがしてある。何も書き込んでいない楽譜のコピーを取るのは無理だ。

「家になかったらどうするの」

「白紙の楽譜を探るか、まだ新しい楽譜」井崎は唸った。「平川さんから借りるしかないわね」

照美は渋い表情をした。平川という名前アレルギーが出ていた。「分かったわよ、家に行って探してくれればいいんでしょ」

「ごめんね、あとでラーメンでもおごるから」井崎は頭を下げた。教師と教え子という関係ではなく、情けない姉としっかり者の妹の関係があった。

照美は踵を返し、職員室を後にした。階段を降り、玄関に出ると下履きと上履きを履き替えて外に出た。蝉の鬱陶しい鳴き声が響いていた。西日の光が熱を連れていた。校外に出てバス停に向かった。真琴と平川が待っていた。2人の隣に立った。

2人は黙っていた。照美のかく汗が多くなった。

「あのさ」照美は声を出した。重い空気に耐えられなかった。

2人は向きを変えなかった。

「楽譜を取ったのは悪いと思ってるわ」照美は2人の方を向いた。2人は蠟人形になって固まっていた。

照美は暑さも相まって徐々に怒りがこみ上げてきた。「何か言いなさいよ、人が悪いって謝ってるのよ。また殴って欲しいの」

「もういいよ」真琴は言葉を返した。「平川さんの言う通り、楽譜は戻ってきたからもういいんだ。蒸し返してもまた同じになるから、どうしようもないよ」

照美は真琴の言葉に黙った。確かにまた殴って職員室に呼び出されれば同じ目に会う。また出ていっての繰り返しでは1日が24時間以上あっても足りない。

「分かったわよ。もう言わないから」照美は素直に謝った。

2人は黙った。照美も何も話す内容がなかった。

バスが来た。3人はバスに乗り込んだ。学生の姿が少なく、年寄が固まって座っていた。窓には薄いシャッターが引いてあり、赤く染まりかけた西日がシャッターを濾して薄く入っていた。3人は別々の席に座った。

『間もなく発車します』バスは動き始めた。

真琴は外の景色を眺めていた。バスは村の大通りを走っていく。学校に入ってから見慣れた景色だった。村祭りの会場になる駅前の広場を通過した。4階建ての建物が並び、4車線もの道路が広がっていた。建物の隙間にガソリンスタンドがあり、隣にレンタカーの事務所があった。車通りはまばらで、渋滞とは無縁だった。

バスは駅前のバス停に停まった。窓から見える駅舎は村と不釣り合いの大きさだった。席に座っている年寄達は皆立ち上がり、運転席の脇にある料金箱に金を投げ入れ出ていった。

入れ替わりで別の年寄が入って空いている席に座った。

バスは駅周辺を次第に離れていった。

発展している駅前から田畑の広がる村の景色が変わっていった。数件のアパートが建つ区域に入った。

ブザー音が鳴り、アナウンスが流れた。

バスはバス亭の隣に来て停まった。平川は席を立ち、バスを降りた。

「意外に近くに住んでるのね」照美は真琴に話しかけた。

「まあ、そうだね」真琴は適当に相槌を打った。大葉の話から転入生が住んでいる場所だと予想はついていた。

「適当な反応ね、だから面白くないのよ」

バスは動き出し、海沿いの道を通っていった。車通りはなく、2階建ての家が立ち並んでいた。

真琴はブザーを押した。ブザーの音が響いた。

バスはバス停の脇に停まった。

「また明日」真琴は堰から立って運転席に向かい、運転手に定期券を見せた。

運転手は頷いた。

真琴はバスから降り、今まで通りの道を辿って家に向かった。

ドアが閉まり、バスが走り出した。バスの中にいる乗客の内、学生は照美だけだった。

年寄が集まって雑談をしているのを見ていた。

バスは山間の道に入った。

照美は停車ボタンを押した。ブザーが鳴った。

バスは山道に広がる住宅街に入って停まった。

照美は席を立てバスを降りた。

バスは去っていった。

照美は通りを歩いていった。住宅街の割に人気はなかった。一軒家にたどり着き、ドアを開けた。「ただいま」
ドアの先には真新しい玄関と、ガラス戸を通して見える居間があった。照美は靴を脱ぎガラス戸を開けた。母親がキッチンで食器を洗っていた。

母親は照美に気づいた。「おかえり、今日も遅かったわね」

「井崎姉が練習だの何だのって居残りさせてるから。もうそんなのしなくてもいいのに」

「しないと本番で転ぶわよ」

「しても駄目な時は駄目よ」

照美は階段を昇っていった。ドアが対面方向に2つあり、それぞれ『照美』と『茜』と書かれた表札が下がっていた。照美は自分の名前が書いてあるドアを開けた。

部屋はよく整理しており、一見して何処に何があるか分かるようになっていた。隅に置いてある机には、ノートパソコンが置いてあった。

照美は机に荷物を置き、ため息を付いて部屋を出てドアを閉めた。『茜』と書いてある側の扉を開けた。

部屋の中は時間が経てば溶ける雪の代わりに物が積もる豪雪地帯となっていた。隅には机があり、隣にはガムテープで閉じた段ボールが積んであった。実家に戻ってきた時の荷物を開けていなかった。

「突然戻ってきて何もしてないなんて、人任せにもほどがあるわ」照美は楽譜のデータが入ったCDは机の上にあると言っていたのを思い出して、机に向かって物を避けて進んでいった。床に画鋲の地雷が仕込んであるかもしれない。慄きながらも机に着いた。危険と隣り合わせの冒険だった。

机の上は書類とゴミの山が出来ていた。

照美は怒りを覚えつつも払いCDを探した。楽譜が入っているCDは販売しているラベルの付いたCDではない。コピーが出来ないようにプロテクトがかかっているはずだからだ。ゴミを払っていく内、ノートパソコンの姿が見えた。上にCDのケースが3枚重なっていた。CDのケースを手に取り、一番上に乗せて1枚ずつ開けてみた。全て真っ白で何もラベルが貼っておらず、縁には「DVD-R」と書いてあった。

「これね」照美はCDを眺めた。楽譜が入っているデータが3枚に入っているはずがない。分割するほど容量が必要ではなく、分割する作業が面倒だ。CDをケースに入れると机に向ったのと同じ歩を踏んでドアに向かった。どれがどれだかわからない以上、無闇に置いていくのは得策ではない。違うCDを置いたと文句を言われたくないので、どれがどのCDなのかを確認する必要があった。

部屋から出た。

照美は安堵を覚えた。危険を乗り越えた登山者の境地だった。自分の部屋に入り、机に3枚のCDケースを置いた。ノートパソコンのスイッチを入れて起動した。起動した後、アニメのキャラクターが壁紙になったデスクトップ画面が映った。

照美はCDのトレイとCDケースを開け、トレイにCDを乗せて押し込んだ。読み込み音がノートパソコンから鳴り、CDの中に入っているデータが映った。映像のアイコンで、ローマ字で打ち込んだ名前のファイルだった。日付は去年になっていた。

「何これ」照美はクリックした。データを読み込み、全画面に映像が映った。薄暗いホテルの一室で制服を着た少女がベッドに座って口を動かしていた。パソコンの音声を切っていた為、何をやり取りしているのか分からなかった。何の映像なのか分からず、机の引き出しからイヤホンを取り出してジャック穴に差し込み音声を聞いた。ほそほそとしていて何をやり取りしているのか聞き取れなかった。

照美は渋い表情をし、マウスを動かしてシークバーを進めた。小太りのあごひげの生えた女に好かれない容姿の男が少女の制服を脱がしながら体をまさぐっていた。少女はあからさまな嬌声を上げていた。

照美はまづいものを見てしまったと気づいた。禁断の領域に立ち入った冒険心で動悸が上がっていくのと同時

に、現実逃避の思考が脳内を駆け巡った。何故教師である姉が不真面目な代物を持っているのかとイヤホンから流れる嬌声と、男の気持ち悪い調子で少女をなぞる声を打ち消した。深呼吸をして少女の姿を見た。男の手により乱れているものの、制服は自分の学校と異なっている。髪型は肩まであるストレートの黒髪で、一般的な『遊んでいる女』と言うイメージはない。寧ろ表情の暗さから真面目で友達のいない学級委員長というイメージがあった。顔のパーツは何処かで見たのに気づいた。

照美は顔をしかめ、何処で見たかを脳内のデータベースから引き出そうとした。今まであった人間と照合していくと、芋づる式にイメージが脳裏に湧いて出てきた。

「まさか」照美は思わず声を出した。映像では少女と男が行為に及んでいた。男の声も乱れ、卑猥な言葉を吐いていた。動きが激しい割に映像が荒く、更に薄暗い場所で撮影しているためにモザイクがかかっているにも関わらず男と少女のところが重なっている部分がどうなっているかは見えなかった。寧ろかかっているほうがグロテスクさはなく目を背ける理由にならなかった。

照美はファイルを閉じた。CDに入っているデータが映る画面に戻った。データ名を見て息を呑んだ。『AYANO_02』と書いてあった。平川が転入してきた時、黒板に書いていたのは『平川 綾乃』と言う名前だった。

照美の表情が緩んだ。慄くと同時に、憎き魔王を一撃で葬る伝説の武器を手に入れた喜びを覚えた。

データをクリックし、再生した。

照美が平川とみなした少女と男との行為が停止した箇所から映った。荒い映像が流れ、男が踏ん張る声を出しながら少女と重なって腰を振っていた。

少女はいかにもな嬌声を上げて自らの絶頂と共に男の射精をせがんでいた。息継ぎが激しく途切れているが、声は平川の声とよく似ていた。

照美は動悸が上がっていき、手が震えた。鼓動が耳を通して聞こえるほどに興奮していた。

映像で男は気持ちの悪い声を上げて達した。わざとらしく体が震えていた。抜くとカメラを取って少女の局部へと動かした。白い液体が垂れていた。乱れた制服で横たわる少女の姿は、切開し解剖を尽くした人間の姿だった。